

# 石川淳「新釈古事記」論

——大人のための〈古事記物語〉

## 一、はじめに

石川淳の「新釈古事記」は、当初「神神—古事記物語」と題され、東洋経済新報社刊行の総合雑誌『総合』<sup>1)</sup>に一九五七年五月創刊号から六回にわたって連載された。『総合』が連載六回目が載った号で休刊になり一度は中断の憂き目に遭うが、その後、筑摩書房から一九六〇年に刊行された『古典日本文学全集』<sup>2)</sup>の第一巻に、残りの部分を書き下ろされ、「新釈古事記」として完成することになる。

「新釈古事記」は、石川淳研究の中で部分的に言及されることがあっても、これを中心に論じたものはなかった。<sup>3)</sup>しかし「新釈古事記」という題名が示しているとおり、これは単なる古典の現代語訳に留まらず、石川淳独自の注釈が加えられているも

のである。

一九五〇年代後半から、石川は〈歴史〉を題材にしながらそれを改変していく、偽史と呼ばれる歴史贋造の小説を書くようになる。石川の後期を代表する長編小説の多くはこれに該当する。

中断する前にあたる「新釈古事記」の前半部分は、これらの小説が現れる前に連載されている。その点を踏まえて石川淳の作品史を見直してみると、『古事記』に注釈を加えるという経験が、後に書く歴史贋造の小説を創作する上で大きな示唆を与えたと考えられる。それゆえ「新釈古事記」を単なる古典の〈現代語訳〉と軽視することはできない。文学的営為の中で、小説創作に比べると比較的低く扱われがちな〈現代語訳〉には、むしろ批評と創作が交差する場が生み出だれている。そしてそれ

帆 莉 基 生

が新たな小説への創作の転換へ原動力を与えた。すなわち従来のジャンルの枠組みをも再考することになり得るのである。

「新釈古事記」の同時代状況を見てみると、「国民文学論」を背景に〈古典〉を〈国民文学〉として召喚しようという動きが起こっていく。その中で『古事記』に光があたることになり、鈴木三重吉の『古事記物語』が文庫化され再刊されるなど、子供向けの読み物として『古事記』が刊行されていく。しかし一方で『古事記』を無邪気に日本の〈古典〉として称揚することは、戦時中の皇民化教育の中心にあった『古事記』を無反省に〈国民文学〉として享受することにつながる。「国民文学論」の論点が保守的収奪されていく過程の中で、日本古来からの伝承がまとめられた『古事記』には日本あるいは日本の文化的風土が色濃く反映していると評価されることになるが、しかしこれは戦時下において〈上代精神〉なるものが提唱され、日本・日本人の精神が『古事記』には凝縮されていると称揚されたことと根の部分では繋がっている。

本論では石川の「新釈古事記」の成立を同時代コンテクストと比較することで、一見『古事記』の現代語訳のように見せかけながら、実はそれに留まらないある種の〈いががわしさ〉が意図されていることを明らかにする。この〈いががわしさ〉は戦後『古事記』が〈古典〉として、かつての歴史の中で背負わされてきた看板を忘却することで、改めて享受されていくことへの巧みな抵抗を示している。数多くの『古事記』を始めとした

古典の現代語訳がある中で、注釈を付けるという営為が、その発想が小説へと転換する原動力へとなった希有な経験であることも明らかにしていきたい。

## 二、転換点としての「新釈古事記」

まず「新釈古事記」を考える前に、石川淳の作品史上における「新釈古事記」の位置づけについて触れておきたい。

この「古事記」に解釈を加えながら現代語訳をするという経験をした後、これ以後に書かれる小説には、以前のものには無かった傾向が見られるようになる。「神神—古事記物語」が雑誌『総合』に掲載される以前に発表された「紫苑物語」(『中央公論』一九五六・二)と「八幡縁起」(『中央公論』一九五八・二)「修羅」(『中央公論』一九五八・七)では見逃すことができない違いが表れている。

従来この三作は連関するものとして関連性が論じられてきた<sup>①</sup>しかし「紫苑物語」と「八幡縁起」「修羅」の間には、関連性を強調するのにはどうしても疑問を感じずにはいられない。<sup>②</sup>

「紫苑物語」は主人公が代々勅撰集の選者に選ばれるような歌道の名家に生まれたということを書き入れるくらいで、具体的な歴史的出来事や人物については一切触れていない抽象的な歴史空間が舞台にとられるだけである。一方「八幡縁起」はいつとはしれない古代から始まり、平安中期の確氷貞光や坂田金時、南北朝時代の高師直らを登場させる。また「修羅」は応仁

の乱を背景として書かれている。このように具体的な時代、人物に即してあるいは参照していることが分かる歴史的事実や伝承がある点でこれらは「紫苑物語」とは異なっている。この「紫苑物語」と「八幡縁起」の間に連載されていたのが「新釈古事記」の前半にあたる「神神—古事記物語」であった。

「八幡縁起」と「新釈古事記」の関連にいち早く目を向けていたのは、『新潮』の一九五八年五月号で行われた寺田透・花田清輝・平野謙の三名による「創作合評」<sup>①</sup>の中の平野の発言であった。「石川さんは「古事記」みたいなものを書きかけていたでしょう。あれの余滴みたいなものじゃないかな」と平野が発言すると、花田も平野の発言に同意して「そうでしょう。作品としては「紫苑物語」の方が成功している」と、評価しているわけではないが、「八幡縁起」と連載されている「新釈古事記」の前半部分の繋がりを指摘している。しかしこれ以上のことは言及されず、またこれ以降も「八幡縁起」と「新釈古事記」の関連性を指摘する論評は、藤原耕作が「八幡縁起」の素材に「古事記」が使われており、それは同時期に「新釈古事記」の現代語訳の作業をしていたからだという論及が<sup>②</sup>されている他は管見の限りない。ここで指摘されているように、「八幡縁起」が「古事記」の現代語訳の「余滴」として書かれたとすれば、「古事記」という具体的な先行テキストを下敷にしたことで、古代王権とそれにつながる者とその後の時代という具体性を帯びるものになったと言える。

もう一つ「新釈古事記」以後に現れた傾向として、〈歴史〉への疑いの目が含まれるようになった点が挙げられる。例えば「八幡縁起」では以下のような言葉がある。

この蘇我氏のほろびたをりに、いにしへより世世のことしるしたる書はみな焼け失せて、正史またほろびたといふ。今の都に、王とよばれ権門とよばれるやかからは、すべて入鹿を討つたる謀反の徒の裔よ。その徒がおのれの都合よく、それごとまじりに作りなしたる史書のごときは、もとより信ずるにたらぬ。

「八幡縁起」で語られるこの言葉は、「新釈古事記」の引用に「この伝承がまつたくほろびてゐるのは、のちの蘇我氏の滅亡と係るところにあるやうにいへれる」と全く同じことを書かれていることに重なっている。権力が掌握されていく過程で、かつての伝承や記録が抹消されて書き換えられたことが語られている。また「八幡縁起」のすぐ後に発表された「修羅」ではこの〈歴史改竄〉を憎悪にまで高めている。

みなみな、かねて申しつけたとほり、この桃花房の討入に古市ものの血筋を賭けよ。この庫、よのつねの庫ではないぞ。つねならば、金帛をこそねらはう。金帛、しひてこのにもとめるな。庫にみちた世世の旧記は、もつてこの国の

史を編むに足るといひつたへる。旧記、なにものぞ。代代の公卿どもが書きちらした文反故の山よ。暗愚ときには知らずして、老獯ときには知りながら、曲をもつて直としたもの、あやまりを掬りかへてまこととしたもの、さだめて多きに居るであらう。このほしいままの筆の跡をさかのぼつて、みだりに国のみなもとをさぐり、家の来歴をきめつけて、枉げて正史の杭を打たうとする。いつはり、ここにはじまつたぞ。いつはりの毒のながれるところ、つひに古市ものの血筋を犯して、これをばけがした。京と古市と、へだたる濠の深さをみよ。げに、文反故の山にこそ悪鬼は棲む。今この悪鬼を討て。旧記秘卷、みなほろぼすべし。いふところの史書はことごとく投げ捨てよ。史を書かば、まさに今より書け。かの庫、公卿の手にとどめるな。また足軽の手にもわたすな。ころあつて、これをほろぼすものは、わが一党のほかにはないぞ。今こそ、よきをりぢや。このをりのがすな

このように正統な〈歴史〉とされたものが偽りであり、人々の意識を知らず知らずのうちに蝕んでいく「悪鬼」であると表現して、嫌悪感を露わにしている。「修羅」では本来悪人であるはずの盗賊が、金銀財宝を狙うのではなく、都の権勢の家にある文庫を襲い、そこに取められている偽りの〈歴史〉という「悪鬼」を焼き滅ぼすというピカレスクロマンとして書かれている。

石川の〈歴史〉に対する疑いの目は、萩原延寿との対談に垣間見られる。<sup>10</sup>ここで「史料一般について、野乗をばかにするなということですね。しかしまあ、正史はむやみに信ずべからずというのは、この前の戦争の大本営発表がみんなウソツパチということでもわかるんでね」と権力が編纂した〈歴史〉ではないものにこそ目を向ける必要があることを語っている。ではなぜそのような必要があるのか、石川は「政府刊行物の正史というのは結局編集ですからね」と、正統な〈歴史〉とされているものは偽造され、正統性を僭称しているものに過ぎないと考えているからだ。言うまでもなく『古事記』は野乗ではない。むしろ本居宣長の国学を巧妙に利用することで積極的に明治政府は〈正史〉として扱い、以後国民の知るべき〈歴史〉であり、国民の道徳の基盤として扱われてきた。「新釈古事記」に付けられた石川の〈新釈〉や、「八幡縁起」「修羅」のモチーフになっているものは、〈正史〉と称して権力者の正統性を保証するための〈歴史〉を嘲笑しようとする姿勢であった。同時にそれは〈正史〉からこぼれ落ちた人々の歴史・記憶に対して眼差しを向けることであった。

### 三、同時代コンテキストにおける「新釈古事記」

「新釈古事記」以前以後では小説の傾向が大きく変わり、石川自身にとって大きな転換点になったが、それではなぜこのように『古事記』本文を直接語り手となるような形で〈新釈〉を

いれる（いかがわしい）ものを書いたのか。「新釈古事記」の成立事情について同時代コンテキストから考察したい。

「新釈古事記」の前半部分が掲載された雑誌『総合』の創刊号の編集後記を読むと、総合雑誌を作るのが難しいこの時期にあえて複雑な同時代の状況を総合的に捉えることを企図して『総合』と名付けられたことがうかがえる。従来の文芸誌や総合雑誌を作っていた出版社ではなく、経済専門誌の版元が挑戦的に創刊した雑誌であったからこそ、石川淳のこのような実験的な（読み物）の掲載が可能だったのだろう。

このような志をもって発刊された『総合』ではあったが、雑誌全体がふるわない時期でもあり、わずか半年で休刊することになる。石川はこれを完成させる場所を失ってしまう。しかし幸いにして筑摩書房刊行の『古典日本文学全集』の第一巻としてこれを完成させて収録させる機会を得る。「新釈古事記」が収録されていることからこの全集は古典の現代語訳を集めた全集である。なぜこのような全集が企画されたのか。『古典日本文学全集』刊行に際して新聞広告にその理由が述べられている。

ここでは「小社は数年前から『日本の古典を現代人のものにする』ための計画をねってきました。ここに文壇や学界の積極的な協力を得まして、正しく美しい現代語訳による古典文学の集大成を刊行することになりました。さらに広く絶賛を博しました『現代日本文学全集』の古典版をひろく御愛読ください

ますようお願いいたします。」と、全集としては破格のヒットとなった『現代日本文学全集』の古典版としての役割を期待して計画されていたことが示されている。訳者にも古典の学者をはじめ作家も名を連ね、そこに石川が『古事記』の現代語訳の依頼を受け、中断した部分以降を書き加えて「新釈古事記」を完成させる機会を得た。

筑摩書房がこのような全集を企画した理由は、一九六一年版の『朝日年鑑』が前年の六〇年を振り返って「35年の全集流行はまさに第3の全集ブームと言われるべきもので、文字通り、全集で明け、全集で暮れた年だった」と記している通り、全集が多く発刊されてよく売れたことが挙げられるだろう。これは突如として一九六〇年に現れたわけではなく、数年前から新聞紙面の広告欄には文学に限らず様々な全集の広告が載せられている。そのような中で古典の現代語訳の全集も河出書房、角川書店、平凡社といった他の出版社も筑摩書房の全集と同時期かあるいは少し早くに刊行を始めている。つまり古典の現代語訳という全集そのものは、けっして珍しいものではなかった。

一度は雑誌の休刊に見舞われ中断するという憂き目にあったが、折柄の全集ブームという機運が「神神—古事記物語」を「新釈古事記」として完成させたのである。

ここまで「新釈古事記」が生まれた背景となる出版界の状況を考察したが、ここで「新釈古事記」が発表された時が、戦後の『古事記』研究の転換点にあたっている点と「国民文学論」

が保守的収奪されていく中で、〈国民文学〉の原初として『古事記』が呼び出されたという点について考察を加えたい。

すでに「新釈古事記」以前以後で〈歴史〉への視線が変わっていることは述べたが、それではこれは石川淳だけであったか言えばそうではない。

例えば国文学者・西郷信綱は『古代文学史（改稿版）』<sup>14</sup>の中で「文学形態は、歴史の内部ではたらく、歴史とともに動くところの文学活動の形式である」と述べ、『古事記』がある種の意図と目的を持って〈歴史〉と連動して編纂されてきた面があることを指摘している。また西郷は具体的に『古事記』がどのような目的と意図をもって編纂されたかについても触れている。

『古事記』は「邦家の経緯、王化の鴻基」として作られたこと、いかえれば古代国家の政治的・精神的規範たるべく作られたこと、またその作成は過去の物語伝承や天皇系図を皇室の立場から整理し直すというかたちでなされたこと、そしてその発起者は天武天皇であったこと、などである。しかもそのさい壬申の乱を大きくあつかい、この乱に勝利したこの天武天皇というふうに指摘しているのが注目される。

西郷はこのように『古事記』が当時の〈政権〉の正統性を示すために創作されたものであることを指摘している。後に西郷は

『古事記』の神話を構造的に読み解いた『古事記の世界』（一九六七）、『古事記研究』（一九七三）を著し、『古事記』研究に革新をもたらすことになる。石川淳と西郷信綱の間には交友があったことが知られており、石川淳が西郷はじめ『古事記』研究の動向に気を配っていたことは想像に難くない<sup>15</sup>。このような『古事記』の革新的な研究が進められる一方で、「新釈古事記」が刊行される一九五〇年代前半に起きた「国民文学論争」は、〈国民文学〉として古典に注目させるきっかけを作ったと言え、古典の現代語訳全集が数多く出版されるのも、そのような要因があったと言えるだろう。

なかでも『古事記』は民族精神が現れた太古の書物として重宝されるようになる。しかしこれは、戦前〈歴史〉として、あるいは道徳の基盤として扱われた『古事記』を、極端に言えば〈国民文学〉と看板を付け替えただけであるとも言える。「国民科」が創設された戦時下の第五期国定教科書では、『古事記』の扱いが非常に大きくなり、『古事記』を読むことは「国初以来の歴史」を知ることであり、また「古代日本人の精神」を知ることができる<sup>16</sup>と謳われている。

この第五期国定教科書を編集した監修官の国文学者・倉野憲司は、第五期国定教科書と同時期に『古典と上代精神』（一九四七）<sup>17</sup>を刊行し「古事記に於ける尊皇心」を論じ、『古事記』には民族精神の土台が現れていることを説いている。その倉野もまた一九五五年に河出書房から刊行された『現代語訳日

本古典文学全集」において「古事記」の現代語訳を担当し、「解説」も執筆している。倉野は「古事記」が「日本文学の源流」であり「日本文学の出発点である」として、「古事記」には「皇位を重んずる心」と「人間的な愛の精神が貫き流れる」(国民文学)であると述べている<sup>18</sup>。戦前に皇国主義思想で語られた言葉を、戦後再び別の文脈で語っていることがよく分かる。「国民文学論争」が示した論点はこれだけに矮小化されるものではないが、少なくとも(国民文学)という名が保守的収奪をされた結果的に、無反省に「古事記」を「日本文学の源流」と語ってしまえる空気を醸成してしまったとも言えるだろう<sup>19</sup>。

「新釈古事記」はこのような同時代状況と呼応しつつ、一見この機運に載っているかのように見える。しかしそう見せながら実はそれらの流れとは(ズレ)ているところに独自性と批評性が見出せるのである<sup>20</sup>。

## 五、「古事記物語」からの逸脱

### ——大人のための(古事記物語)

「新釈古事記」と同時代に、現代語訳の全集が相次いで発刊されたことは別に、もう一つこの時期『古事記』が広く受け入れたであろうことをうかがわせる顕著な出来事があった。それは「古事記物語」と題された児童向けの読み物が同時期に重なって刊行されていることだ。

本論では「新釈古事記」と繰り返し呼び論じてきたが、当初

これが「神神—古事記物語」という題名で連載されていたことに改めて目を向けたい。副題に「古事記物語」とあえて付けられているところに意図が垣間見られる。「新釈古事記」が「古事記物語」として始められたことに注目し、これ以前に刊行された「古事記物語」と比較することで、「新釈古事記」(「神神—古事記物語」)の異質性を明らかにしたい。

鈴木三重吉と福永武彦はともに「古事記物語」と題する読み物を刊行している。鈴木三重吉の『古事記物語』は一九一九(大正八)年七月から一四回に渡って『赤い鳥』に連載されたものである。福永武彦の『古事記物語』は「神神—古事記物語」が掲載されたのと同じ年一九五七年の一二月に岩波少年文庫として刊行されている。福永に比べると、鈴木の『古事記物語』は約四十年前に刊行されており、比較対象にならないように思われる。しかしここで取り上げたいのは、『赤い鳥』に掲載された当時の『古事記物語』ではない。

前節で触れた全集刊行が相次いだ頃、もう一つ出版界の目立った傾向として、様々な出版社から、かつての(名作)を競って文庫版として刊行したことが挙げられる<sup>21</sup>。鈴木三重吉の『古事記物語』も一九五五年一月に角川文庫版が刊行される。こうしてみると石川が『総合』誌上に「神神—古事記物語」を掲載している頃、同じく「古事記物語」と題されたものが二つ世に出ていることになる。

鈴木三重吉の文庫化再刊も、福永の少年文庫用の執筆・出版

も折柄の『古事記』への再注目の時流があったと言えるだろう。この三つの「古事記物語」を比較してみよう。

鈴木三重吉の『古事記物語』は「解説」で窪田譲治が「この三重吉の古事記物語のほかに、児童のための古事記はないようです。つまり、古事記の決定版というものがありません。それほど尊敬されたわけです。尊敬されすぎたのであります。その点、この古事記物語こそ児童用古事記の決定版とも言えるのであります」と言っているように、鈴木三重吉の『古事記物語』が大正期から戦時下へと、長きに渡って愛読されたものであった。窪田が語っているように、神話を〈歴史〉として受け取らねばならない時代に書かれたものであり。「歴史童話」という題がつけられていることをまず始めに確認しておく必要があるだろう。基本的に余計な注釈は付けず、『古事記』原典に書かれている〈出来事〉を児童にも分かる平易な言葉で、また叙情的に記している。また鈴木版に特徴的なのは天皇について書かれているところには終始一貫敬語を用いて恭しく書いていることである。

例えば仁徳天皇の治世を褒め称えた箇所では、

天皇はしもしもに對して、これほどまでに思いやりの深い方であらうございました。ですから後の世からも永くお慕い申し上げてそのご一代を聖帝の御代とお呼び申しております

と書く。

太平洋戦争が激化する中、一九四二（昭和一七）年に編纂された第五期国定教科書の国民科において『古事記』に比重を置き、「修身」「歴史」「国語」それぞれで『古事記』を〈歴史的事実〉として扱っている。同時期に鈴木三重吉の『古事記物語』もまた「歴史童話」と称されて、一つの〈歴史的事実〉として児童たちに差し出されていた。それが一九五五年に再び角川文庫版として刊行され読者の手元に届くことになったのである。

戦前・戦後を通してまず「古事記物語」として人口に膾炙したものが鈴木版『古事記物語』であった点を踏まえると、石川が当初「古事記物語」と名付けていたのは、鈴木版『古事記物語』を強く意識していたからであろう。

そのように考えられるのは福永版の『古事記物語』における仁徳天皇の治世に関する記述を踏まえてみるとよく分かる。

こういう情けぶかい天皇でしたから、人民も大そうよろこび、のちにこの天皇の御世を聖の御世と呼んでたたえています

鈴木版が天皇に対して過剰に敬語を使っていたのに対して、福永版は淡々と『古事記』原典の記述を児童にも分かる言葉で現代語訳するにとどまっております、〈現代語訳〉としてはむしろ鈴木版以上に原文の記述に忠実である。またこの箇所でも分かる

通り余分な注釈は一切つけてはいない。

以上二つの『古事記』物語と比較すると、石川版は単なる（現代語訳）ではなく、過剰なまでに（注釈）を付け加えている。

仁徳天皇の治世の箇所は以下である。

かくて、人民榮えて、夫役にとられても苦にしなくなつた。  
この世をたたへて、ヒジリ（聖）の世とはいう。ここに聖  
代なんぞというのは、もとより唐山よりの思想にほかなら  
ない。

引用した箇所では明らかなように、後半が『古事記』本文での記述から甚だに逸脱している。

本居宣長は『古事記伝』の中の「直毘靈」で、かつての聖代では下々の者も天皇の御心を自らの心として、畏敬の念をもつて天皇の仰せにしたがい安らかに暮らしており、それが〈大和〉の自然状態であったと説いた。宣長はこのような自然状態は儒仏思想である（漢意）が入る以前の〈大和心〉の中にあり、〈大和心〉を求めため、古代を探求する必要があると唱えた。そして〈大和心〉を再び取り戻すため、古代の文献である『古事記』を精読し、その中から〈大和心〉を見出そう、というのが宣長の思想の骨格であった。

しかし石川が加えた「この聖代なんぞというものは、もとより唐山よりの思想にほかならない」という注釈は、宣長が〈大

和心〉を求めて探求しようとした『古事記』にさえ、既に外来思想の影響が見えるという痛烈な批判に外ならない。石川の宣長に対する斜に構えた批判は、同時に倉野憲司を始めとする、『古事記』には「上代精神」が現れていて、そこに日本人の精神の源流があると高らかに謳う同時代の人々に対して向けられたものであつただろう。<sup>24)</sup>

鈴木・福永と同様に「古事記物語」と題されていた石川版は、他の二つが児童のために書かれたのに対して、東洋経済新報社刊行の総合雑誌『総合』に掲載されていたところからも、児童向けではなかった。それでは石川版「古事記物語」は誰に向けて書かれていたのだろうか。それは、かつて国定教科書や鈴木版『古事記物語』を読んだ〈大人〉のために書かれた「古事記物語」だったのでないか。石川版は一見そのまま読めば『古事記』の現代語訳として読めるが、『古事記』原文や、かつての国定教科書での記述や、鈴木版『古事記物語』と突き合わせで比較してみると、石川の過剰な注釈が付け加えられている部分が露わになり、またその注釈されていることの意図が理解できるように書かれているのである。ここに石川があえて「神神—古事記物語」と題をつけていたことの企図が見えてくる。

## 六、石川の現代語訳

次に「新釈古事記」に見られる石川淳の注釈を特徴を見てみたい。「新釈古事記」が『古典日本文学全集』の第一巻として

刊行された時に、石川は後書きにあたる「訳者のことば」<sup>(36)</sup>において、どのような姿勢で現代語訳したかを述べている。

石川はまずここで、『古事記』を訳す上で逐語的に忠実であることが基本であるが、正確に書かれていることを伝えるためには「ときに部分的には訳としての基本の筋に拘泥しないことのはうを撰ぶといふ必要があつた」と基本姿勢を表明している。そして読者のために「部分に於て、ちとの注、ちとの解説に似たものを附さなくてはならぬやうなところに、すくなくともそれを附したほうが理解に便利とおもはれるやうなところ」には必要に応じて積極的に原文に注釈を加えることも表明している。そして「原文と拙訳とを突きあはせて読んで下さるとしたらば、それこそ訳者の望みはたたる。そもそも訳者の究極の目的は、この拙訳を捨てて、ただちに古事記の原文に就くやうに、読者をうながすことにあつた。」と語っている。

一見この言葉を鵜呑みにすると、古典の原典に親しんで欲しいというような一種の社交辞令のようにとられなくもない。しかし前節で他の『古事記物語』と比較したとおり、〈原文〉と石川の〈現代語訳〉を突き合わせて読むと、かえって訳者の石川が付け足した〈新釈〉の意図が鮮明になってくる。そこで改めてこの「訳者の言葉」を読み返すと、石川が注釈や解説を付けたのは、付けた方が「理解に便利」だと思われるところだと言っている。換言すれば、石川が『古事記』原典をこのように「理解」すべきではないか、と読者に対して提示しているの

あり、巧みな言葉の綾の中に石川の仕掛けが隠されているように思えてならない。

それでは「新釈古事記」における石川の注釈・解説の特徴を明らかにするために、三つの点に絞って考察したい。「神について」と、「歴史について」の項と、〈出雲〉についての記事である。これら三点は「新釈古事記」全体の性質を如実に体现しているものである。

まず「神について」の石川の注釈を見てみたい。上巻一章の「国生まる」で以下のような記述がある。

おもへば、さきだつ神神はいづれもひとりものであり、ひとりものは男であつたと合点された。男と女との一組。どうやら、神神も人間くさくなつて来た。形勢はそろそろ下界のほうにさそひの水をむけてもよいころであつた。そこで、クニノトコタチからかぞへて七代目に、イザナギ、イザナミといふ男女二柱の神がおくり出される番になつた。

神神のつどふところは天である。この天がくせものである。天は命ずることを好む。そもそのものはじめから、はるか後の世までも、日本の天はむやみに命じたがる。神神はすなはち若いイザナギ、イザナミに命じていふことに、  
…(略)

このように「新釈古事記」では、「国生みの神話」も厳かに

描き出すことはせずに、神神の人間臭さ、人間らしさを強調し、擲揄を加える。『古事記』原典に書いてある話の筋をゆがめて、いるわけではないが、原文から大きくかけ離れるような〈新釈〉を加えていると言えるだろう。

別の箇所では神々を祀る祭祀と政治とが不可分であることをはっきりと示し、「さういつても、祭祀と政治と、つながら善縁あるひは悪縁がないこともない」「祭祀の式さだまつて、政治の仕掛けもまたととのふ。後世はここで大むかしの祭政一致といふことの意味をおもひ出さなくてはならない」と注釈を付け、政治と祭祀が隣り合わせのものであることを示している。別の場所では「神威すなはち武威。大和国原の固め、ここに成る」と〈神威〉とされているものは、人間の力である〈武威〉なのだと書き込んでいる。また「死んだあとから追ひかけて、別の名がつくやうになると、だいぶん間くさい。カムヤマトイハレピコ、その兄イツセと、もう二柱ともいへまい、この二人」と〈柱〉という神々を数える単位を〈人〉に意図的に言いかえて、いることからも、あえて神々の人間らしさを強調していると言えるだろう。

なぜ石川が「神について」このような〈新釈〉を加えているのか、それを考えるためにもう一つ石川の特徴的な〈解釈〉であると思われる「歴史について」を見ていきたい。

人間がそこに配置されてゐないやうなところでは、神神は立瀬が無いだらう。あるひは、立瀬をうしなふやうな危険

がないだらう。さういつても、永日のひかげが移るやうに、すこしづつ、気がつかないうちに、神神の歴史は人間の歴史のはうにしのび寄つて来る。このすりかへの陰謀はどちらの側からおこつたのか知らない。人間が神神の振舞に於てとくに人間的意味を見つけようとしなくても、神神のはうでは、蘆の角と相似であることよりも、人間と相似であることのはうを好むやうである。神神のはなしを人間にうながすものは神神である。やがて、神神の血は、かりに血があるとしたのはなしだが、後世の人間の系譜の中に振りこまれることになつて来るだらう。いや、系譜はともかく、その心情に於て、神神ははやくも人間と相似によるこび、またかなしんだ。

以上引用した部分を見ても分かるとおりに、『古事記』で書かれている神々の歴史はあくまで人間の歴史の中で創出されたもので、だからこそ神々に〈人間らしさ〉が反映されているということを暗に示している。

ではその〈歴史〉はいつ書かれたのか。別の言い方をすればいつ創り出されたのか。「新釈古事記」ではいわゆる「欠史八代」に関する記述の中で以下のように説明する。

ありえたはずの歴史上の事件も個人の哀歎も、すべて空に帰して、この伝承がまつたくほろびてゐるのは、のちの蘇我氏の滅亡と係るところにあるやうにいはれる。何にしても、国は大和、家は天皇、その裔おのおの大小の柱を立て

て、実在の骨組みができあがつてしまふと、すでに雲の中の神神の世界ではないのだから、地上に人皇という思想を生ずる。この人皇初代が神武であつた。そのあと八代、伝承はほろびても、すなはちはなしのたねは絶たれても、のちのちまで引継がれた権力は実在したにちがひない

『古事記』が語る出来事はさまざまな伝承が減びた後だと書き入れ、「新釈古事記」の末段では『古事記』が伝えることは「史実」か「伝説」かと投げかけて終わっている。このような所にも石川の「新釈」の意図が隠れている。

このように「新釈古事記」は、石川淳独自の「解釈」が明確に打ち出され書き入れられている。ここで改めて先に引いた石川の「訳者のことば」で語っていることを振り返ってみると、「原文と拙訳とを突きあはせて」ほしいと言ふ願ひは単なる社交辞令ではなく、原典と比較されることでより石川の「新釈」の意図がかえつて明らかになる。比較されることでかえつて原典と自分の「新釈」の距離が明らかになって浮かび上がってくるというある種の戦略であつたとも言えるだろう。

## 七、〈出雲〉の収奪

そしてもう一つこの「新釈古事記」において特徴的な注が加えられているのは〈出雲〉についての記述の箇所である。

大国主と八上比売が恋歌を送り合う箇所では「こう歌つて、すなわち誓のさかずきをとりかわし、たがいに手を頸にかけて、

仲むつまじく、ついに倭の沙汰におよばず、大国主、今に至るまで出雲にはじずもる」と書かれている。石川はここで倭の勢力に関わらないところで〈出雲〉が始まったとあえて書き込んでいる。

スサノオの神の裔は、ほかに男女いく柱、穀物の神あり、竈の神あり、家の神あり、末ひろがりひろがる。またその居るところの地は、出雲よりおこつて、韓土にも、大和にも、山城にも、和泉にも、近江にもおよび、なお紀伊に、北陸に、信濃にわたる。この神神、あたかも大国主の威徳をたすけるかのやうに、羽翼を四方に張るに至つた。後世にいきおいを伸ばした日枝の神、松尾の神のごときも、はやくこの中にかぞへられる。政治のはうから見れば、これは出雲氏族の勢力分布図のやうである。しかし、神神のはなしでは、これをスサノヲ、オホナムヂ系の信仰分布図としておく。さういつても、祭祀と政治と、つながる善縁あるひは悪縁がないこともない。

下線部を引いた通り、〈出雲〉のくにつくりは、〈出雲〉が勢力をどんどん伸ばしていた様子が書かれていることを示している。それにもかかわらず、倭（＝高天原）勢力がそれを収奪しようとしてくるのだ。

石川はその様子を以下のように注をつけながら現代語訳する。イツノオハバリとは、かのイザナギの佩いた剣の名であつた。宝剣の神霊、火と水と石に縁あつて、この河上の

石屋にせずもる。秘めたる剣を今こそ抜け。タカマノハラ  
の奥の手、わるい癖である。

ここで石川は「剣」つまり、「暴力」をもって国を譲るよう  
に〈出雲〉勢力がに迫ったことを明確に書き、またそれが「癖」  
であると、倭王権にありがちなことであると書き込んでいる。  
〈出雲〉が国を譲るのを最終的に「せつかくの剣も血ぬらずに  
終わったが」と書くところからも〈出雲〉勢力が〈暴力〉的な  
力を背景に収奪されていったことを示している。

以上によれば、「新釈古事記」では、『古事記』の中で〈神〉  
としてあがめられているものが、支配する権力の座にいる〈人〉  
が都合良く作り出したものであり、また〈歴史〉も同様に都合  
良く編纂して自分たちの正統性（正当性）をプロパガンダする  
ものであることを説いている。

## 八、おわりに

「新釈古事記」の独自性は『古事記』研究や歴史学の研究の  
新しい知見を取り込みながら、従来文学史上ではまったく評価  
されていない古典の現代語訳に新風を吹き込んだところにある  
のではないか。「新釈古事記」では石川淳自身を想定させる「訳  
者」という語り手が、嘸み碎きながら読者に『古事記』の〈物  
語〉を語り継ぐような体裁をとっている。だからこそ『古事記』  
原文と注釈の境界線が分からないような〈いかがわしい〉文体  
になっている。それは図らずも単なる〈現代語訳〉であること

を超えて、批評と創作が交差する場を生み出しており、結果的  
に〈歴史〉や伝承に異議を唱えるその後の石川の偽史の小説へ  
とこの試みは継承されるのであった。このことは従来の小説創  
作中心の文学史の中では見落とされてきたのではないか。

山口俊雄は「白頭吟」以降、石川が革命を描く小説は少な  
くなり、しかも同時代を描かなくなる。例えば、「八幡縁起」「修  
羅」（一九五八）は古代史や中世史に革命的契機を読み取るう  
とする試みであった」と、「神神―古事記物語」が雑誌連載さ  
れている同時期に連載されていた「白頭吟」以前以後で石川が  
書く小説に変化があることを指摘している。裏を返せば「神神  
―古事記物語」（「新釈古事記」）を境に書かれている小説が著  
しく変化するのである。

従来伝えられている〈歴史〉こそ、改変されてねじ曲げられ  
たものである、〈歴史〉への疑いの眼を向ける。『古事記』に注  
釈を付ける作業は〈現実〉を舞台に活動する人々を描くのでは  
なく、言わば〈現実〉が乗っている土台にある〈歴史〉に揺さ  
ぶりをかける行為と言えるのではないか。「新釈古事記」での  
経験が象徴的に〈歴史〉に揺さぶりをかけるという試みのきつ  
かけを与えたとと言えるだろう。

そして無反省のまま〈国民文学〉の源流として『古事記』を  
称揚しようとする時代の動きの中で、紀元や源流を求めて正統  
な〈歴史〉を抛り所にしようとする浅ましい行為に対して「新  
釈古事記」やその後の小説群は嘲笑し、揺さぶりをかける。知

的な批評性を持っていた。<sup>30)</sup>

以上の通り、さまざまな同時代の状況が錯綜する中で「新釈古事記」は生まれた。そしてそれは石川の新しい方向性を示した貴重な経験となった。この批評と創作が交差する点から「至福千年」「狂風記」といった後期の代表的な長編小説が書かれることになった。

## 注

(1) 『総合』は東洋経済新報社初の総合雑誌として、一九五七年五月号で創刊されるが、一九五七年一〇月号で休刊になる。編集後記を見ると当初は誌面を刷新して復刊する予定であることがうかがえるが、そのまま復刊することなく廃刊となってしまう。

(2) 『古典日本文学全集』は全三六巻で、一九五九年から一九六六年まで刊行された。

(3) 「新釈古事記」については、吉川宣時「石川淳と本居宣長―宣長を学ぶべく奪ふべし」(ウイリアム・J・タイラー/鈴木貞美編著『石川淳と戦後日本』、ミネルヴァ書房、二〇一〇・四)で、石川の本居宣長受容の痕跡が見える一例として触れられている。しかし本論では、むしろ「新釈古事記」では、宣長的な「古事記」の読解を拒絶することに大きな狙いがあったのではないかということとを考察している。

(4) 菅野昭正は「石川淳の方法―その近作をめぐる―」(『批評』一九五九年春号)で、発表当時から「八幡縁起」を「紫苑物語」

と「修羅」と併せて、ひとつの「ライトモチーフにつらぬかれ」た「三部作」であると評し、その論を未だ主張している。

(5) 「紫苑物語」と「八幡縁起」の変化については、拙論「石川淳『紫苑物語』論」(『青山語文』二〇一・三)で論じている。

(6) 『新潮』一九五八・五での「創作合評」で寺田が早くから紀元節復活論議との関連を指摘している。ここで寺田は、「八幡縁起」のストーリー展開において「名なしの大神」がいつの間にか「武の神」として崇められるようになってしまったところと、国の始まりに「紀元節」と名前が付けられて「今度はそれに相応するものと考え方をしだして、国にはじめがあるという普遍的な事実と違うことが信じられはじめること」に共通性を見出し、「八幡縁起」にはそうした論きに対して「アイロニーがなんとなくある気がする」と述べている。寺田がここで述べている点が現れてきたのが、「新釈古事記」以後であることは留意する必要があるだろう。

(7) 藤原耕作「石川淳『八幡縁起』考」、『福岡女子短大紀要』一九九四・二二、ここで藤原が論じているのは、「八幡縁起」と『古事記』の関連であり、あくまで「新釈古事記」の作業はあくまでもその二つをつなげたという点で言及しているのに対して、本論では寧ろ「新釈古事記」こそが「八幡縁起」以後の小説創作へのモチーフを与えたと考えて論考を進めている。

(8) 蘇我氏滅亡に関する記述はいわゆる「欠史八代」と言われる、八人の天皇治世について、『古事記』原典にも記録が残されていない理由について解釈をしている。



野憲司であった。戦時体制の中〈国史〉として『古事記』が利用されていく中で、倉野が一翼を担ったことは容易にうかがえることである。

(17) 至文堂、一九四二・三

(18) 『現代語訳日本古典文学全集 古事記』河出書房、一九五五・一〇

(19) この時期はいわゆる〈逆コース〉の中で保守勢力が勢いを増していた。「紀元節復活運動」の機運は年々強くなり、「紀元節が第一位 総理府に届た国民の声」(『読売新聞』一九四八・二・六朝刊)「タクシーに日の丸 復活決議で氣勢をあげる」(『読売新聞』一九五七・二・二一日夕刊)、「まかり通る紀元節 東京では昔通りの式典 多い旧軍人の参加」(『朝日新聞』一九五七・二・二一日朝刊)など、紀元節復活を求める声が年々強くなる。このような〈紀元〉を求める声と、紀元の物語である『古事記』の〈国民文学〉としての要請は明らかに連動していたと言えよう。

(20) 〈国民文学〉という名が保守的収奪されるなかで、古典文学に光があたる。なかでも『古事記』は外来思想の影響を強く受ける前の日本古来からの「精神」が読み取れるものとして称揚されていく。このような〈純化〉された『古事記』という見方を否定して、『古事記』も外来思想の強い影響のもとに成立したものだといえている。

(21) 当時「角川文庫祭」と題する広告を数多く新聞に載せ、日本の古典や世界文学の有名作品を文庫化したことを大々的に宣伝して

いる。

(22) 『古事記物語』岩波少年文庫、一九五七・一二

(23) 吉川宣時は「石川淳と本居宣長」において、石川が『古事記伝』を読む中で、「超国家主義者とは違う顔をした宣長を掴まえていた」と評価している。吉川の意見は興味深いが、本論では、どちらにしろ〈超〉国家主義に回収されてしまった本居宣長の『古事記』研究に対して、石川が大きく距離をとり、批判をしている点にこそ意味があるのではないかと考えている。

(24) 倉野憲司はその後、岩波文庫『古事記』(一九六三・二)で校注と解説を書き、岩波文庫版『古事記』は現在まで重刷されている。極論を言えば、無反省のままに蘇った倉野の『古事記』の解釈を現在までも受け入れていると言えるのではないだろうか。

(25) 『古典日本文学全集』では全巻末尾に「後書き」の代わりとして、その巻に現代語訳を担当した作家や研究者が「訳者のことば」として所感を述べている。

(26) 〈出雲〉の収奪は〈神話〉の時代に限ったことではない。原武史『出雲』という思想 公人社、一九九六でも詳しく論じている通り、明治国家の「国体」が確立する中で〈出雲〉が排除されていくという「祭神論争」が起こる。一方で「国体」を強固にする思想として本居宣長の『古事記』解釈が重用されていくことになる。「新釈古事記」における宣長への擲論は、明治国家あるいは「近代天皇制」そのものへも向けられていると言えるかもしれない。

(27) 〈出雲〉の収奪は土地の収奪ではなく、〈歴史〉の収奪であった。

笙野頼子や野田秀樹がこれをモチーフに小説・戯曲にしているが、「紀元節復活運動」が盛んになる同時代にあつて石川がいち早くこのことを指摘していたことは特筆すべき点であろう。

(28) 「石川淳「白頭吟」論―左翼運動・一九二二年と一九五六年と」『愛知県立大学文学部論集国文科編』二〇〇六・三月

(29) 石川は「紀元節復活運動」を始め、保守勢力の戦前回帰の氣勢に對して「狂気の沙汰」だと「人生ノート 狂気と正気」(『サンデー毎日』一九五六・四・二二)の中で明確に批判している。

(30) 石川の文学活動の後半に書かれる長編小説群は概ねそのような性質を有していると言えよう。例えば「至福千年」(『世界』一九六五・一―一九六六、一〇)は、幕末の隠れキリシタンの革命を日本の近代化を問い直す試みであったと言えるし、「狂風記」(『すばる』一九七二、二―一九八〇、二)では、古代から現代までつながっている〈悪縁〉を絶ち切ることが描かれ、〈天皇制〉のようなものが問われていたと言える。

(ほがり・もとお／弘前大学助教・本学非常勤講師)